夏目漱石『明暗』における「愛」について

葛西紗弓

序論

「愛」という言葉について、我々はどれほど考えたことがあるだろうか。夏目漱石は、晩年の作である『明暗』において、女性の視点からの「愛」について描いている。この『明暗』という小説には、物語全体を通して必死に「愛」を求め続けるお延という女性が登場する。本論文で、『明暗』における「愛」を見ていくことによって、「愛」の正体に迫ってみたい。

『明暗』のあらすじは以下の通りである。主人公の津田由雄とその妻お延は半年前に恋愛結婚したが、二人の生活はどこかぎくしゃくしている。お延は津田からの「愛」を得ようと日々奮闘しているが、津田は妻の技巧じみた所作を、少し気味悪く思ってしまうこともある。金銭問題などの様々な問題を抱えながら夫婦は二人で暮らしているが、あるとき津田は上司の妻（吉川夫人）に唆され、以前交際していた女性（清子）の元へ、お延に内緒で出かけてしまう。津田と清子が再会して間もなく、この作品は作者死亡のため未完で終わる。津田とお延、そして彼らを取り巻く様々な人間関係と、それぞれの人物の思惑が複雑に絡み合う様子を、巧みな心理描写を用いて描いた作品である。

第一章　お延について

お延は、愛する相手を自分の眼で選び、その相手から絶対に愛されなければならないという強い意志を持って行動する。彼女が夫の津田から欲する「愛」は、絶対的な「愛」である。お延が求める絶対の「愛」とは、夫が自分以外の女性を女として見ずに、自分だけをたった一人の女として愛してもらうという「愛」であり、この境地まで行かねば本当の「愛」は得られないと彼女は主張する。複数の好きな女が存在する中で、自分が一番愛されているという相対的な「愛」では満足できないのがお延である。そしてお延は、夫から絶対の「愛」を得ることが出来れば、幸福になれると信じている。だからお延は、津田から絶対の「愛」を得るため、日々努力する。器量が良くないことに劣等感を抱いているお延であるが、その分、夫のために親切の限りを尽くし、気が利く女性を演出して、良き妻であろうとする。

しかし、夫の津田は、お延の努力に答えてはくれない。お延が良き妻として振舞っているはずの行為は、技巧臭く、わざとらしさを津田に感じさせてしまう。また、お延の、夫を自分の思うとおりに愛させたいという強い意志を日常的に感じている津田は、常に彼女に警戒せざるを得ない。お延自身も、どんなに努力しても、自分を愛してくれるようなそぶりを見せない津田を、自分勝手な夫だと思い、不満を感じている。

第二章　津田について

津田は、お延と結婚する以前、清子（きよこ）という女性と交際していた。結婚間際になって、清子に突然逃げられた津田は、今でもその過去に囚われている。清子は、津田の眼から見れば、おっとりしていて緩慢な女性であった。自尊心が強い津田は、何故自分が清子に急に裏切られたのかが、未だに分からない。津田は、物語の後半で、お延に内緒で清子に会いに行く。しかし、清子に会いに行くことを決めたのは、彼の意志によるものではない。常に世間体を気にする津田は、既婚者である自分が、同じく既婚者である女にわざわざ会いに行くような真似をする人間ではない。津田は、上司の妻である吉川夫人の策略に乗せられてしまったのである。

第三章 『門』『こころ』の夫婦との比較

ここまで見てきたように、お延と津田の心はすれ違ってしまっているが、彼ら夫婦が互いに本当に求めているものは、穏やかで安らげる家庭なのではないだろうか。『明暗』の夫婦とは違い、夫婦間で「愛」が実現し、穏やかな夫婦関係を築いているように思われる夫婦像がある。『門』と『こころ』の夫婦である。

『門』の宗助とお米は、世間から離れて、互いだけを唯一必要として生きている。『こころ』の先生は、奥さんをこの世に存在するただ一人の女性として、また奥さんも、先生を唯一の男性として認識し、夫婦生活を営んでいる。しかし、先生は、自分の重大な悩みを妻には打ち明けずに、一人で苦しんでいる。夫が一人で苦しむのを見るに耐えない奥さんは、自分も先生と共に苦しみを分かち合おうと、先生の心へ介入しようとする。ここから、男性側は自己を理屈で守り固めて殻に閉じこもろうとするのに対し、女性側は男性の理屈を越えようとするということが分かる。『こころ』の奥さんの、相手の理屈を打ち破ろうとする情念を、ここでは「愛」と呼ぶこととする。奥さんの「愛」は、相手を苦しみから救いたいという相手本位の「愛」である。『門』のお米も、自分のことよりも夫のことを第一に心配するという相手本位の「愛」を宗助に与えている。それに対し、お延の「愛」は、夫のためというよりは、自分を救うためのものとなってしまっている。つまり、お延の「愛」は自己本位の「愛」に過ぎないのである。

第四章 「愛」について

自己本位の域を出ないお延の夫への「愛」は、いかに夫のために役立つ妻であるかをアピールすることに重点が置かれている。彼女の「愛」は、夫の実生活で表面的に役立つことはあるものの、夫の精神的な面には配慮が足りてない。自分では精一杯尽くしているつもりでも、知らず知らずのうちに、津田の希望を打ち砕いてしまうことが何度もあった。つまり、お延の夫に対する「愛」は、自己本位で表面的なものに過ぎないという、矛盾を抱えた「愛」なのである。

しかし、このように夫婦間の「愛」に矛盾が生じてしまうのは、津田とお延に限らない。日本で「愛」という言葉が男女間の親しみの意を表すようになったのは、明治時代に入っ

てからのことである。日本では、古来より、男女間の親しみを「恋」という言葉で表してきた。明治に入って、西洋近代語「ラブ」や「リーベ」等が輸入されてからは、「恋」という言葉は現実的で肉体的な意味を表すようになり、「愛」という言葉は、男女関係を理想的で精神的なものと捉えるようになった。しかし、翻訳語はどうしてもずれが生じてしまう。近代日本の「愛」について、伊藤整氏は、「西洋的な宗教的祈りの習慣を持たない日本人にとっては、「愛」という言葉は無理が生じ、虚偽を含むこととなる。日本においては、理想と現実が伴わない「愛」という言葉で表された男女関係は、結局理想の域を出ず、「愛」を信じた人々は、破綻を迎え挫折せざるを得なかった。」と指摘する。

しかし、お延は「虚偽」「理想」に止まるだけの「愛」に対しての「反逆者」になり得るのではないだろうか。『こころ』や『門』では、妻が相手本位の「愛」を発揮できていたにも拘わらず、どちらも将来の希望が絶たれてしまっている。それは、『門』『こころ』の夫婦が、過去に犯してしまった罪悪から逃れられないためである。だが、『明暗』は、これから問題が起こるという入り口を示した所で終わっている。従って、津田やお延がこれからどうなるのかは永久に分からない。しかし、先が分からない分、お延の「愛」には将来の可能性を託すことが出来るのではないだろうか。『明暗』の終盤において、お延が、今まで囚われていた見栄や欲を捨て、そして自分が裏切られてもなお、津田に対して「愛」を発揮するという「勇気」を出す兆しが見られる部分がある。そうして夫の苦しみへと手を差し伸べる事が出来るのならば、お延の「愛」は相手本位のものとなり、しっかり相手と向き合うことができるであろう。そんなお延の姿を見て、津田の心も、清子ではなくお延の方に向かうことが出来るのではないだろうか。

自己本位の域を出ず、「虚偽」に止まってしまうだけの「愛」が、相手本位のものへとなっていく可能性を、未完で終わってしまった『明暗』の先に託したいと思う。